空間・社会・地理思想 6号 130-141頁, 2001年
Space, Society and Geographical Thought

地理学と社会

(『地政学と歴史』の第1章)

クロード・ラフェスタン*
(遠城 明雄 **訳)

Claude RAFFESTIN
Géographie et société
Dans chapitre 1 de *Géopolitique et histoire.*
Editions Payot Lausanne, pp.9-28,1995.

表象と媒介

現実的なもの(rèel)の表象の理論を精緻化しようとする他のいかなる学問や認識体系と同様に、地理学は歴史性を刻印された社会的生産物である。地理学が取り組む現実的なものの外部性と他者性は複数の歴史によって完全に浸透されているので、このことはますます明らかである。その歴史の空間的かつ時間的な複数のスケールは、直接には比較することはできないが、それは自然の歴史と人間および社会の歴史が存在するという理由からだけであろう。

地理学は、哲学とその点で異ならず、生産された言説がそれに先立つ言説を無効にして、安定した永遠の常態を確立するであろう、という幻想のとりこになっている。政治地理学がこうした欠点を常に回避できてきたわけではないが、地政学は根本的にこうした欠点に特徴づけられている。つまり地政学は、歴史のある時期に、唯一の決定的な言説として自らを確立しようとしたのであり、現在も相変わらずこうした意図を放棄できていない。

一般的に哲学および諸科学が、過去と一線を引いて、未来に関する見解を獲得するという秘密の傾向を持っていることを暴くことで、あらゆる表象システムがそのシステムを誕生せしめた歴史と、少なくとも曖昧で逆説的な関連を維持していることを我々は示したい。事実、同じ変動のなかにあって、このタイプのシステムは歴史を否定するか、あるいは同じことであるが、歴史の終焉をあれこれの仕方で宣言するのである…。こうしたシステムが哲学的であるとしても、あたかも究極的な成果であるかのように自らに根拠を与え、発展し、自らを正統化する諸科学にとってもまた、この問題は無視できない。なぜなら諸科学は決して終わることのない道程上にある歴史的な諸段階にすぎず、自然諸科学に関してそうであるなら、ましてや人文諸科学ではなおさらである。ハンス＝ゲオルグ・ガダマーが説明したように、こうした種類の幻想は、その対象さえ、絶えず更新される複数の出来事の働きによって産出される人文科学の側よりも、自然科学の側で明瞭であるけれども。

すべての学問はある社会のなかに現出するが—社会は明らかに学問にとってひとつのモデルを構成する—、たとえ歴史が、死に至った文化や文明によって埋め尽くされていることが周知であるとしても、明らかにその社会の欲望は、永続し、時間と歴史を横断して、最終的には永遠になることにある。文明、文化、社会の衰退(デカダンス)という主題はとりわけ魅力的で、さまざまな歴史哲学を生み出してきたにもかかわらず、諸社会は自らが永遠であり、時間を限りなく横断し続けるだろうと信じ続けている。ポール・ヴァレリが、「我々は死を免れない存在であるので、他の諸文明を

* ジュネーヴ大学
**九州大学

知るのである」[1]と書く時に、彼はただ単に、永続するという社会の欲望の周辺にいるのであって、その言説はこの単純な事実の確認以上のものとは受け取られない。

すべての社会的産物は持続というこの幻想のただ中にあり、諸科学の表象システムはこうした幻想から逃れていない。表象システムは社会と擬態(mimétisme)関係にある。ルネ・ジラールが分析しているように、生産された言説と社会の間に確立された擬態関係は、上で暴かれた幻想を超えるが、その理由は、認識する主体と認識される客体の間に常に介在している科学的な活動の媒体(médiateur)—社会的「他者」—を構築しているのが、社会それ自体だからである。多くの点で、「媒体は想像上の架空のものであろうとも、媒介(médiation)はそうではない」[2]。想像上のものであるというのは、その認識の欲望がいかなる妥協も望まない主体は、完全に媒体の影響を蒙っているにもかかわらず、媒体を拒否するという意味においてである。

地理学はとくにこうした媒介に左右されてきた。つまり地理学はしばしばまさに喜んでそれに服従してきたが、それもまた当然である。なぜなら地理学は、常にではないとしても多くの場合に、自らを作り上げた社会の鏡になることを意図してきたからである。以上のことを納得するためには、ストラボンの地理学の第一巻を読めば十分である。すなわち「地理学は(…)、哲学者の領域の他のいかなる科学と同じであるように思われる。そして多くの事実が、我々にそのように考えることを可能にしてくれる。つまりまず第一に、地理学を論じようとした最初の発案者が哲学者であったという事実。」[3]。こうした基礎の上にストラボンは、「同じような仕事を首尾良く成し遂げたい人にとって不可欠な認識の多様性」、さらに「民衆の欲求と長たちの利益に同時に役立つ地理学が持つ可能な応用の多彩さ」[4]について論じている。「しかしながら彼は次のように付け加える。我々のこの主張に、他のもの以上に有利に働くように思われる別の理由がある。つまりそれは地理学がとりわけ政治活動の欲求に応えるということである。」[5]ストラボンによって生きられた擬態関係はローマ帝国を介している。ストラボンが、「政治活動の欲求」、「民衆」の欲求そして「長たちの利益」として、「他者」を同一化する時に、彼は自らはっきりとこの擬態関係を示しているのである。我々はこの擬態関係を、以下の頁を通して再び見い出すであろう。

しかしながらこの擬態関係を発展させる前に、以下のことを簡潔な形で示すために二千年を飛び越えることにしよう。つまり1920年から1945年の間に、イタリアとドイツのみならずヨーロッパならびに世界で、つまりファシスト型の体制が思想の核心に根を下ろしたあらゆる場所で、この関係が地理学をどのような点で変質させたのかということである。

ひとつの世界から別の世界へ…

我々の意図は、時代区分を行うことではない。もっと慎ましく18世紀中葉から20世紀中葉にかけての地理学と社会の間の諸関連を理解することを目標として、歴史的に重要ないくつかの参照点を提案することである。したがって体系的な時代区分を提案するよりも、いくつかの契機を明らかにすることが問題となる。

フランス革命に先だつ数年間で、我々に重要と思われる日付は1748年、つまりモンテスキューの『法の精神』が出版された年である。この作品は、気候や土地の性質、ある民族の習俗と態度、商業、住民数、宗教と法との関係を分析することで、「地理学的な関心」を明示的に表している。モンテスキューの目的は地理学的なものではないが、その作品の注意深い読解は、ひとつの政治地理学の構想を素描することを可能にしてくれるだろう。1751年に若きテュルゴー[6]が行ったのがまさにこの仕事である。この「テュルゴーのプログラム」のなかで我々に興味深いことは、それがジョン・ロックからモンテスキューを経由してアダム・スミスへと至る自由主義思想の潮流との関係で、政治地理学の構想を位置づけ直したことである。

ロックにとって市民社会の本質が、自己とその労働の果実の所有によって始まる所有であることを我々は知っている。この視座において国家とは所有を保証するものである。つまり「自然とは所有が作り出される場であり、所有の原理を異論の余地のないものにすることである。—社会とはもし必要があれば、力によって自らを維持する場である。」[7]このような自由主義の同じ信条を、我々はアダム・スミスの『諸国民の富』[8]の中に再発見するが、この作品のなかで国家は市場、交換、所有の場として存在している。この点について次のことを指摘することは興味深い。すなわちテュル

ゴーが、その草案の2〜3年後に「政治地理学について」と題された断章のなかで、「自然権は各人にその土地を自分の意のままにすることを任しているように思われる。」[9]と書く時に、まったく類似した視座にいることである。しかしながら少し後でテュルゴーは、ある財の悪用と社会がその財について持つ一般的有用性との間に対立がありうることを認めることで、「例えば、一人の人間が有用な豊饒さを無駄な壮麗さに置き換えてしまうことや、労働者大衆を養うための土地がもはや数人の有閑階級の人々の散歩道でしかないといったことを避けるように」提案している。そして「人間の基本的ないくつかの権利に遡らねばならない。土地はすべての人間に与えられていた。人間は全員同じ父の息子であり、誰も相続権を奪われてこなかった。」[10]

この予備的な考察によって、テュルゴーの構想が一層理解可能になる。彼の構想は、結局のところ将来のアダム・スミスの経済学概論に関する一種の地理学的序論である。このことは、テュルゴーが次のように書く時に、特に明らかであるように思われる。つまり政治に対する地理学の関係に関するあらゆることは、「生産の多様性とコミュニケーションの自在な能力という二つの項目の下に」集約されるだろう。「事実上、この二つの可変的な要素に基づいて、政治地理学のあらゆる問題は解決されねばならない。しかしながらそこにさらに国家の分割が付け加えられねばならないだろう。そしてこの分割は、部分的にはこの二つの原理に依存しているが、部分的には一連の時間のなかで継起していく偶然の出来事にも起因している。」[11]

さらにテュルゴーは、権利と歴史に等しく果たされねばならない役割を考えていた。なぜなら唯一の国家は存在せず、その固有の法によって統治される複数の国家が存在するからである。実際テュルゴーにとって、「それぞれの時期はひとつの政治地理学を持っており、この名前は出来事のさまざまな継起の流れが必然的に終わる現在の瞬間を記述するためにとりわけふさわしい」[12]。最終的にテュルゴーは政治地理学という語彙に次のことを含める。つまり「理性的な世界史、この世界史の結果としての政治地理学、私が政治地理学理論と呼ぶものを含むであろう統治論」[13]である。次にこの構想は、全部で七つの世界図(mappemondes)上で展開されるが、この世界図は、「優れた望遠鏡を持っている月の居住者が(そこで)作成できるような」[14]、地球の地理的記述を報告しなければならない。

テュルゴーの政治地理学の企図は、自由主義政治思想の潮流に含まれるが、もしそのはっきりとした証拠を提出しなければならないとしたら、権力(puissance)と国家の間の区別を想起することが許されるであろう。「権力というものが、その本質が国家に付与した境界表示(bornes)に帰着される時に、権力は結局のところ再び国家になる。政治地理学は諸国家の境界を引いた。つまり公法が諸権力を形成する。だがいつかは、政治地理学が公法に対して優位を占める。なぜなら自然が公法に対していつかは優位を占めるからである。」[15]テュルゴーの政治地理学がなぜ過去と現在だけに組み込まれるのかを、我々は理解することができる。確かに征服という観念を含むことになる未来は、もちろん考慮されるが、それは直ちに非難されるために考慮されるのである。つまり「獲得できる範囲にあるものだけが長く保持される。なぜなら失われた時に容易に取り戻すことができるものは、大抵の場合にいつかは失われるに違いないからである。」[16]テュルゴーのこの最後の命題は、境界を承認しないあらゆる拡張主義を前もって非難することによって、民族間の闘争的な均衡の哲学あるいは民族間の平和の哲学を含んでいないだろうか。テュルゴーが触れている「自然の境界表示」は曖昧なままである。つまりすでに自然境界が問題になっているのかあるいは別のことが問題であるのか。テュルゴーはそれについて説明していない。

テュルゴーの構想の影響力に関する研究が存在しないように思われるとしても、エミール・ルヴァセール[17]が指摘するように、テュルゴーがいずれにせよ、19世紀と20世紀の転換期において数人のフランスの地理学者たちによって読まれ、おそらく熟考されていたことを明らかにするいくつかの指摘が我々にはある。

テュルゴーが着想を得た自由主義が、彼が所有に与えている役割のゆえに、トーマス・ホッブスよりもロックに依拠していることが注目されるだろう。ホッブスにとって、「国家の役割は、人間に道徳的生活を生みだしそれを促進することではなく、各人の自然的権利を保護することにある」[18]からである。レオ・シュトラウスに従うと、この政治的教義において「基本的事実は、義務とは区別された人間の自然的権利であって、国家の使命はこの権利を守り、擁護する点にある」[19]ことを認めるならば、自由主義の真の創始者はホッブ

スであろう。

ところで、国家をその分析対象としている諸学問にとって、重大ないくつかの帰結をもたらすことになる国家に関する別の着想が生じるのは、自然権の転換、いわば自然権の危機からである。政治地理学の根幹は、権利のなかに潜んでいる。テュルゴーの場合に、理論地理学は「統治論」であるので、そのことは完全に明白である。最近の他の著者たち、例えば進歩主義的自由主義を決して疑うことのないカール・シュミットは、こうした観念を追認している。こうしてシュミットは、「大地は神話的言語において法の母と名付けられる。」[20]と書いている。したがって「大地に対する関係」のあらゆる変化が、権利と国家の役割に影響力を及ぼすことになろう。

18 世紀末の 1792 年に、ウィルヘルム・ド・フンボルトは、「国家は市民に対して幸福、実定的な財(le bien positif)、福祉を与えることに決して関心を寄せてはならない。だが国家は市民に対して、消極的な財、安全性、市民がひとりでは獲得できない独自のものを保証しなければならない」[21]。国家に境界表示を置くこと、つまり国家に境界を付与すること、それは「国家が市民の実定的な財に対するいかなる処置からも免除されること、市民と面前の外敵との間の安全を市民に保証する必要がもはや問題ではないこと、別の目的を優先して市民の自由を決して拘束しないこと」[22]を勧告することである。しかしながらフンボルトが国家の役割を限定しようとしたまさにその時に—我々はフランス革命のただ中にいる—、ルソー主義の思想は、自由というものを自己自身への服従に依存させ、自由は権利の源である市民によって保証される、と提案することによって、近代的自然権の最初の危機を生じさせる。人民への主権の移行、国家を急進化することによってそれを行ったのがフランス革命である。

その若き日にフランス革命によって影響を受けたヘーゲルは、個人の権利として構想された「自然権」に対して「有機的自然権」[23]を対置するだろう。この有機的自然権が優位にあることは次のように説明される。つまり「道徳的秩序の実定は、絶対的な道徳的全体性が民族以外のなにものでもないことにある。」[24]したがって「有機体としてひとつの国家である民族はそれゆえに、絶対精神の唯一の具現化である」[25]。こうしたアプローチは戦争の哲学によってもまた敷衍される。つまりヘーゲルによると、戦争は、複数の独立したシステムが孤立のなかに根を下ろして、固まってしまうことを避けるために必要である。

ゆえにヘーゲルは、自由主義が着想するような国家の観念に反対する。ヘーゲルとともに、真の国家は市民社会を超越する。なぜなら国家は次のような最終目標であるからである。つまり「国家において、自由は客体的となり、実定的に現実化される。」[26]19 世紀前半の思想に対するヘーゲルの影響は、特に我々がこれから見るように地理学を含めた人文諸科学のなかで大きなものであろう。しかしながらカール・リッターの仕事を利用することによって、ヘーゲルが行った地理学に基づいた歴史的省察は、カントとヘルダーの仕事を参照すれば、新しいものではないだろう。

さてヘルダーは、ヘーゲルとは異なり、「諸民族の声」(Stimmen der Völker)、すなわちヨハン・ゲオルグ・ハーマンが人類の母なる言語[27]であると語るあらゆる民衆詩に熱狂することで、ハーマンによって宣言された非合理主義的思潮を発展させる。ハーマンとヘルダーはロマン主義的思潮のなかに入るが、その根幹は自然哲学と神話学である。このロマン主義運動に結びつくのは、特にフィヒテである。フィヒテは、1807～1808 年の冬季に行われた講演、『ドイツ国民に告ぐ』によって、歴史家たちがプロシアの政治的復活の前提条件としての民族の道徳的復活と呼ぶもののなかで、重要な役割を果たしている。したがって指示対象(référence)の新しい要点、つまり新たな偶像は、民族と歴史になる。すなわち「何が「有機的」に一つの民族であるか、何が「民族精神」を意味するかはそれ故に歴史的にしか確定できない。そして民族もまたここでは歴史的発展の結果なのであって、ルソーの場合のように自分自身の主人ではない。」[28]ここで新たなこと、それは民族それ自体が、「民族精神」(Volksgeist)[29]を生み出す「客観的現実、歴史的発展」となることである。

ロマン派の人々のなかには、過去を通じて今の現実から逃れ、他所を発見するというこの欲望が存在する。彼らが、動いているものすべてに特権を与えるのはこのためである。彼らの中の一人であるアダム・ミュラーは、国家を「ひとつの有機体であり生きた個体、つまり人間のなりわいの総体」として定義している。つまり「国家は、単なる工場でも、農場でも、保険施設

でも商業団体でもない。国家とは、身体的な帝国と精神的な帝国の内的関係であり、大きなエネルギーを備えた無限の、動き続ける、生きた民族の内的生活と外的生活の内的関係である。」[30]こうした着想はさらに、「生活形式としての国家」("Der Staat als Lebensform"という彼の作品を参照せよ)という観念を用いるチェーレンにその痕跡を残している。そして我々は後でこの観念に立ち戻ることになろう。

さていくつかの再検討は、古典的自由主義への反対に収斂するが、この自由主義は19世紀に、またそのうちのいくつかは20世紀になってようやく開花することになる複数の政治的立場を現出させることによって終焉することになる。まず最初に、ルソーによって先鞭を付けられた自然権の危機、ヘーゲルとロマン主義的非合理主義によって擁護された国家の観念があるだろう。そしてこの非合理主義は、ドイツにおいて「民族(völkisch)」[31]運動によって利用される題材を用意し、間違いなく神話のなかでファシストとナチズムの運動をはぐくむことになるのである。

やむを得ず一般的になってしまったこれらの考察をひとまず措いて、政治地理学に再び戻ろう。だが問題の背景となる状況をはっきりさせるためには、少なくともこうした考察が必要であった。ヘーゲルがカール・リッターの業績を利用して、『歴史哲学講義 La Raison dans L'Histoire』という題でのちにまとめられる講義を行ったことはよく知られている。ところでそのリッターは、シェリングの哲学、とりわけ引力と斥力の様態の上で機能する極の表出である、その「全体(Tout)」概念によって影響を受けていた。政治地理学に関して、1845年という日付をもつ『政治地理学 Die politische geographie』[32]と題された著作があることを強調するのは興味深い。その著者エルンスト・カップは、疑いなくカール・リッターと同時にヘーゲルの弟子である。エルンスト・カップがほとんど知られておらず、また忘却されているとしても、彼はラッツェルによって読まれており、ラッツェルは多くの点でカップに刺激を受け、『人類地理学』のなかでカップを引用しているのである。我々により近い時代では、カップはまたカール・シュミットの小品『陸と海と』[33]に着想を与えた。本論のなかで、カップの政治地理学にはただ取り上げる以上の価値がある。なぜならその政治地理学は、リッターの「地理学 Erdkunde」[34]とラッツェルの政治地理学をつなぐ環を構成するように思われるからである。

『哲学的あるいは比較的一般地理学 Philosophische oder Vergleichende allgemeine Erdkunde』の序文でカップは、「近年、地理学はたびたび哲学と接触している」[35]と書いている。リッターとヘーゲルを結びつけることで、カップは、「真の'歴史的な知(Geschichtskunde)'の必要条件は'大地の哲学的認識'であり、その認識は'政治に対する予備的な訓練'として考えることができる。つまり'あらゆる場所は、その生成のなかにあってその歴史の実験室となる。人間の意志のすべての現動は、潜在的かつ即自的に、境界づけられた空間に限定され、その地理のなかに組み込まれている'」。[36]

したがって国家形成のあらゆる萌芽は人間のなかにあり、その開花が歴史であって、その時に地理は人間学的になる。ここでこの人間学的という言葉は、人間の目的が自然を支配することによる人間精神の解放にあるという意味で理解されるべきである。政治は諸国家の知(Lebensweisheit der Staaten)となる。政治とは、国家活動の認識であって、この活動は理性、道徳、自由の諸法則を通して実現されるひとつの全体として理解される。なぜなら人間は単にひとつの精神ではなく、ヘーゲル的な語義で主観性から客観性へと移行する精神だからである。この移行は、民族精神の顕在化によって生じ、自由意識へと向かう人類の運動である世界史の過程を通して、国家観念のなかで実現される[37]。さらに「人間は自然全体に秩序を与える原理である」とするカップがはっきりと引き継いでいるリッターとヘーゲルの影響は、カップの『政治地理学』[38]のなかに十分に見て取ることができる。

カップは、世界史における精神の開花に「芸術作品」を認める。カップは地表面上に構成的空間を認めているが、その根本は、リッターが定義した意味で生命を構成する要素であるところの水である。つまり「水は単に地質や植生のなかにあるだけではなく、諸文化の向上の起源として動物と民族の歴史のなかにもある。諸文化の進歩の起源でもある。こうした運動は、河川の流れる地方、海岸線、内海から海を越えた世界的な諸関係へと到る。」[39]リッターのなかに、ミレットのターレスによって守られていた水の原理というこの古い前スコラ的観念を再発見することに、我々は驚かされ

るだろう。だがローレンツ・オッケンのような、19世紀の何人かの著作家が「海洋起源」によって人間を説明することを知っているならば、それは驚くべきことではない。

この観念を再び取り上げることで、カップはそこから表象としての彼の政治地理学を条件づける三つの重要な形態を引き出している。

—「河川的(potamique)—オリエント的」世界

—「海洋的(thalassique)—古典的」世界

—「大洋的(océanique)—ゲルマン的」世界

カール・シュミットは『陸と海と』のなかで、「世界史は海上権力(列強)の大陸権力(列強)に対する闘争であり、大陸権力の海上権力に対する闘争である」[40]と主張して、カップの観念を取り上げている。シュミットはこの問題に関して、中世のカバラ主義者を引用している。カバラ主義者にとって世界史は、リヴァイアサンとビヒモスの間の闘争によって特徴づけられるものであり、リヴァイアサンはビヒモスを飢えさせようとする一方で、ビヒモスはリヴァイアサンを分裂させようと努めている。より歴史的であろうとする視座において、我々は19世紀末までのロシアとイギリスの間の闘争を知っているが、両者は熊と鯨によってシンボル化されていた。そこでもう一度カール・シュミットは、「陸と海」の間の対立が17～18世紀以来、大洋が人々に開かれれた後、世界についての最初の全体イメージの誕生とともに、ヨーロッパ諸民族の権利の構造を支配したと書いている[41]。

カップはアジア(河川的—オリエント的世界)に優位性を与えているが、それは全くリッター的かつヘーゲル的である。「したがってオリエントの光が、精神と同様に自然に対して確認される。」[42]二番目の世界(海洋的—古典的世界)は、「海上権力(die Macht des Meeres)」[43]の世界であり、地中海の伝統的イメージに基づく。海とは、西洋が自らの根源を負っているものであって、カップによれば、ヨーロッパがその歴史的活動の力をそこから獲得したものであって、世界史の地理的中心である。それは海が、キリスト教西洋とイスラム教東洋の邂逅によって三つの大陸の結節点という役割を過去において果たし、いまなお果たしているからである[44]。

三番目の世界(大洋的—ゲルマン的)は、第二の世界の一般的発展を表す世界である。つまり「ヨーロッパの大洋的部分は、ゲルマン世界の国家の中核にとって有効な土地を構成する」[45]。そしてコンスタンチノープルがコロンブスの誕生後に滅亡したと付け加えるカップ。カップのなかに、ゲルマンの優越性という主題を強調する最初の輪郭が存在しているが、それには(まだ)人種主義の痕跡はない。「ゲルマン的あるいは大洋的世界において、精神は、自然を記憶のなかに刻み込むことによって、自然を克服し、自然に対して自由にふるまう。」[46]その上、カップがその結論で強調し、展開させようと努めているのは、いわゆるゲルマン民族のグループのなかで、ドイツ国民がその中心的位置を占めるということである。

カップの政治地理学は、我々が今日その言葉に与えている意味で、多くの点において地理学的であるよりも哲学的であるが、人間に根本的な役割を与える興味深い省察を作り上げている。なぜなら人間は世界という舞台の上で中心的な役者として考えられているからである。アレクサンダー・フォン・フンボルトの博物学的伝統とは明らかに別の伝統であるが、この伝統は19世紀後半と20世紀前半において、多くの地理学者と人文科学の思想家の関心を再度引きつけることになるすべての重要な動向の萌芽となっている。

地理的近代性？

地理学(Erdkunde)の父たちがその姿を消したその時に、ダーウィンが種の起源に関する研究によって舞台に姿を現した。彼の研究は、直接的にはダーウィンのものとは思われない「社会ダーウィニズム」[47]を通して 西洋思想のなかに生物学的次元を刻印しつつあった。それは自然科学のみならず社会科学をも革新し、社会科学は社会における生存競争という命題を前面に押し出すことになった。ドイツにおける、ダーウィンそれゆえ特に「社会ダーウィニズム」の最も熱烈な擁護者は、エルンスト・ヘッケル—エゴン・フリーデルによってダーウィン主義者の聖典の聖パウロと形容されている[48]—であったが、ヘッケルはラッツェルの思想の生成において否定できない役割を果たしている。オーギュスト・コントの実証主義と結びついた「社会ダーウィニズム」は、ハーバート・スペンサーの進化主義思想へと至った。スペンサーもまた、ラッツェルにとってひとつの典拠となっている。ラッツェルは物

質と移動という観念をそこから汲み取っており、この観念は地理学に移し替えられて、ラッツェルが土地と有機体の成長に認める重要性の説明を可能にしてくれる。

19 世紀中葉以来、カール・マルクスの偉大な仕事を通して、我々は唯物論的弁証法の誕生を目の当たりにする。しかしながらその影響力は、その時代の地理学に対してはほとんど目立たず、20 世紀になってようやく大きなものとなったが、浅薄といえる「経済主義」を通して以外は、政治地理学分野に対する影響はわずかであった。

同様に 1853 年と 1855 年の間、したがってダーウィンの著作が出る数年前に出版された、アルテュール・ゴビノーの著名な『人種の不平等性に関する試論』[49]に注意する必要がある。この著作は、多くの禍をもたらすことになる人種観念を哲学－政治思想のなかに導入した。ゴビノーの可能な解釈とは無関係に、ゴビノーは、「ドイツとオーストリアのナショナリスト的かつ反ユダヤ主義的環境に論拠」を与えた。「ドイツの拡張主義的かつ植民地主義的な目標を擁護するために、1893 年に創立された愛国主義者同盟、アルゲマイネドイツ連盟の総裁であったハインリッヒ・クラスは、ゴビノー、ポール・ドゥ・ラガード、ヒューストン・スチュワート・シャンブランを一緒にして援用している」[50]。

アルフレート・ローゼンベルク[51]によって『20 世紀の神話』へと通俗化された『20 世紀の生成』というヒューストン・スチュワート・シャンブランの書物[52]ほど確実ではないとしても、また変質されているとしても、ゴビノーの歴史哲学は第三帝国の下で利用されることになる。

ラッツェルはテーヌの熱心な読者である。我々は、ラッツェルが 1863 年のテーヌの『イギリス文学の歴史』の序論において定義されたような環境の観念に対して、大きな重要性を認めている証拠を、『人類地理学 Anthropogeographie』[53]のなかに持っている。ラッツェルはテーヌと同様に、「社会ダーウィニズム」と生物学によって深く影響されていたのだろう。それゆえに政治領域において伝統回帰主義とナショナリズムに重なり合う用語のある程度の類縁性と、全く同じではないとしても類似した省察がある。

ラッツェルの政治地理学は、多様な要素の一種の結合であり、多くの潮流から彼が読解することで借用した諸要素の収斂である。その政治地理学は、哲学的－政治的観点から、いかなる体系的特徴も有していない。政治地理学にとって鍵となるような精確な起源を確定することはできないが、ヘーゲル主義、ロマン主義、「社会ダーウィニズム」からの彼の借用をたどることが出来るという意味で、その政治地理学は折衷的である。彼が占めていた位置の故に時代に身を投じることで、ラッツェルは常に時代精神を掴もうと努めた。例えばそのことを示すのは、1900 年の『民族の偉大さの起源としての海 Das Meer als Quelle der Völkergrüsse』[54]のような作品であり、それはドイツに対して強力な艦隊を要求する汎ゲルマン主義の国家主義的かつ帝国主義的な思潮のなかに位置づけられる。ラッツェルの叙述は、明らかに全く新しいものではないが、そのように感じられ得るものであった。その理由は、この叙述が、経済的な諸要素が本質的役割を演じている新たな素地のなかにあるからである。

この新しいコンテクストとは、ポランニーが語る大転換のそれであり、この転換はあらゆるものを商品と市場に転換することによって、並外れた工業化を通して既存の経済的諸条件に影響を及ぼしつつあった。この驚異的な経済発展、レーニンにとって資本主義の最高段階[55]になるであろう帝国主義の物質的基盤が、西洋諸列強をして植民地による本国領土の拡張へと駆り立てることになる。マックス・ウェーバーに、それ以降もはや意のままになる新たな大陸は存在しない[56]と言わしめた、ベルリン会議(1884－1885)でのアフリカ分割は、この事態を見事に示している。このような状況は、新たな紛争の時代に帰着するが、この時代は、産業資本と金融資本を融合した国際独占によって代表される政治の経済に対する従属という傾向があることから、「経済力の過度の充溢」を誘導するための場所がもはや存在しないという事実によって特徴づけられる。

特にラッツェルがそうであったように、この新たな諸条件とイデオロギー的コンテクストによって、次のような考えが導き出される。つまり成功を望む強大国は大陸的かあるいは海上的かという二者択一ではなく、大陸的であると同時に海上的になることができるのであって、その活動の場は世界のある地域ではなく、世界全体であるということになる。したがって何人かの観察者は、政治的展開を判断するために利用できる概

念装置を再考せざるを得なかった。特に歴史に対する海上権力の影響(The influence of Sea Power upon History[57])(1890)に関するT.マハン(Mahan)の著作、歴史の地理的軸(The Geographical Pivot of History[58])(1904)についてのハロルド・J.・マッキンダーの著作である。これらの著作は、まずそのグローバルな見方と、次に本質的に実践的な特徴という二重の観点で重要である。この二つの観点はいわゆる地政学的思想のなかに、発展かつ強化さえされた形で再発見されることになるだろう。彼らの著作が出版された時に、まだ特に地政学的アプローチが存在していなかったという理由にしか過ぎないだろうが、マハンもマッキンダーも地政学者として考えられていない。海上戦略の歴史家としてのマハンは、自分が述べていることのいかなる政治的帰結も、自ら書いたものからは引き出してはいない。マッキンダーは、ヨーロッパによって支配された平和の均衡、つまり一種の「パクスヨーロッパ」を目指すために、そのグローバルな見方を利用している。それでもやはり二人とも、チェーレンに始まり、カール・ハウスホーファーとそのエピゴーネンたちによって存続された地政学によって、論拠の原典として利用されたことに変わりはない。しかしながらそれが、20世紀前半に断片やスローガンの形で再利用されることになるいくつかの貢献によって、19世紀と20世紀の曲がり角に痕跡をとどめた思想の大きな一部であることを、間違えてはならない。

おそらく起こりつつある変化を最もよく説明する哲学はベルグソンの哲学である。『創造的進化』によって彼の哲学は、印象主義の芸術思潮のなかで再発見される変化しやすい個体的現実、生の飛躍(l'élan vital)、運動を議論の中核に置いている。ベルクソンは『笑い』のなかで、20世紀の政治運動が利用することになるカリカチャーの美学を素描している。確かにニーチェも同様に、神話を創造する貴族主義的な個人主義とアイロニーに培われたその思想によって、そうとは知らずまた望まないうちに、劇的な役割を果たしている。19世紀末に明らかに神話がその姿を再び現している。そして神話が現在に対して影響を及ぼすという目的の成功とその手段を保証するという意味で、ジョルジュ・ソレルは神話から一つの説明的な仮説さえ作ることになる[59]。新たな価値の探究に取り付かれたソレルは、社会主義からファシズムへと進む。パラドクスに満ちた精神、すなわちソレルはこの行為と運動の意志、多くの人々にとって文明に死をもたらす病と考えられているものによって触れられないための手段となっている停滞への恐怖を、十分に体現している。ヨセフ・シュムペーターの経済発展の理論は、技術革新に基づき、こうした運動への嗜好を理念的に示しているが、それはフィリッポ・トマッソ・マリネッティの未来派のまさに核心に再発見される。そして1909年にさかのぼるその未来派宣言のなかで、乱雑さ、危険への嗜好、精力と無謀さへの慣れ、勇気、大胆さ、反逆、一サモトラケの勝利よりも自動車を選択させる—速度の美、闘争、暴力的な襲撃、戦争、軍国主義、愛国心が賛美されている。

こうした運動の爆発の根幹は、明らかに多くのことからなるが、混乱もしている。なぜなら言葉の十全な意味で、折衷的でここそこから知識が取り出されており、実証主義と科学主義の遺産と交錯する非合理主義的かつ生気論的な立場に対する魅惑によって条件づけられているからである[60]。これらの傾向は、ガエタノ・モスカとデ・ヴィルフレード・パレートの反議会主義とエリート主義的学説によって極めて明瞭に示されている。さらに我々は、それ以前の1845年のマックス・シュティルナーと『唯一者とその所有』に遡ることができる。シュティルナーはそこで単刀直入に次のように明言する。「皆、自分自身にだけ重要性を与えるのであり、他者とは常に衝突する。したがって自己ー肯定のための闘争が不可避なのは明白である。」そして引き続いて次のように付け加える。「征服あるいは敗北—それらはこうした闘争がその間を揺れ動くことになる二つの極である。征服者は主人となり、被征服者は臣下となろう。主人はその主権と‘絶対的な支配権’を行使し、敗北した者は‘臣下の義務’を恐れと尊敬のなかで果たすことになろう」[61]。

ところで未来派はマリオ・モラッソによってその基礎を作られたのであるが、彼にとって、「近代崇拝(modernolatrice)、機械中心主義、好戦論が中心的な諸要素となる」[62]。一方でマリネッティとムッソリーニとの出会いは観念よりも神話から作られた出会いであり、悲劇の結末が、イタリアファシズムの最終幕であるサロォ共和国へのマリネッティの参加であるとしても、両者の断絶の契機はいくらもあったであろう。

文化と政治を切り離すことは、危うさを伴わざるを

得ない。両者の間には多くの相互作用があり、政治は、自らに知的かつ精神的な正統性を与えるために、頻繁にずうずうしく文化を利用する。科学的あるいは文学的な文化分野で、政治上の目的に奉仕するような人々は皆、明らかに悪用され、欺かれ、幻想の犠牲者となるか、あるいは結局のところ単に権力によって打ちのめされるかである。

技術文明の驚くべき発展が目撃されると同時に、人口が急激なリズムで増加して大都市が成長する。歴史への大衆の出現とは、「人口集中(密集)、充満の現象」であり、オルテガ・イ・ガセットはその現象を次のように命名する。つまり「群集という概念は量的であり、かつ視覚的である。その性質を変えないで群集なる概念を社会学の術語に翻訳してみよう。そうするとわれわれは社会的大衆(マス)という観念を得る」[63]。それがギュースターヴ・ル・ボンが報告する群集の誕生である。ムッソリーニは、ル・ボンを読み、そこで人間の扱い方を学んだと語っている。オルテガ・イ・ガセットは、人間－大衆、すなわち社会階層の上から下まで、至る所で見いだされるような自分自身に満足する平均人を告発する。この意味で、ガセットは彼なりの流儀でニーチェに呼応している。ニーチェは『善悪の彼岸』のなかで次のような予感を書いている。「この新しい条件のもとでは、概して人間の均等化と凡庸化がつくりだされ—有用で、勤勉で、いろいろと役に立つ器用な畜群的な人間が生まれてきているが、反面同じ条件は、もっとも危険で魅力的な性質をもった例外的人間を発生せしめるうえに最適である。」[64]オルテガ・イ・ガセットにとって、平均人は、「地理学における海水準の役割と同じ役割を歴史において果たす」[65]。当然のこととしてイタリアファシズムを厳しく非難するスペインの思想家、『大衆の反逆』を著した時にそれにふさわしい場所にいた唯一の人物は、野蛮性へと回帰するのに30年もあれば十分であろうと考えている。自由主義者として彼は、暴力のなかに、第一悟性(最初の手段)(prima ratio)になりつつあった「野蛮の大憲章」[66]をみる。したがって彼は、歴史の地平上に自由民主主義の終焉がはっきりと現れるのをみるのである。

18世紀と19世紀の産物である自由主義は、資本主義によって優先的に発展させられた諸手段を前にして消え去る傾向にある価値に没頭している。つまりそれは、マックス・ウェーバーの非常に有名な「世界の脱魔術化」であり、強大国の政治へと帰着する「リアルポリティーク」というマキャベリズムの事後的な勝利である。

第一次世界大戦間に対立することになるレヴァイアサン、神話上の怪物たちが、1914年の『今日の列強 Die Grossmächte der Gegenwart』のなかでルドルフ・チェーレンによって演出されている。この著作は、実際にはエーテボリにおけるチェーレンの講義であり、1905年にスウェーデン語で仕上げられていた。これは第一次世界大戦間に、大変よく読まれた作品であって、その成功は1916年の『生活形式としての国家 Der Staat als Lebensform』によって拡大されることになる。

行為と権力へと向かうこの行程を最もよくまとめているもの、いわばその行程の帰結にあるものは、オズワルド・シュペングラーの著名な『西洋の没落』のなかに現れている。シュペングラーは、すべてのものが永続的変化の法則に結びつけられるという意味で、非－連続性の仮説を提示する。諸科学のなかに非ユークリッド幾何学や新しい物理学が影響を及ぼしたことを考慮すると、非－連続性という仮説は、シュペングラーが著作を書いた時期に関連する相対主義の帰結である。シュペングラーは、ゲーテの方法とニーチェの諸問題の立場を借用すると宣言して、西洋思想に対してドイツが影響力を与えた一世紀を明確にしている。しかしながら彼はとりわけ、生物形態の相観学[69]の一種であるその歴史形態学によって、19世紀の総括を行うのである。

シュペングラーがその著書を発表した年、つまり1917年に勃発したロシア革命は、マルクス・エンゲルスの思想を援用することで、世界に対して最初のプロレタリア独裁を知らしめる。自由民主主義と議会制民主主義にとっての明らかな挫折。そして民主主義国家は第一次大戦後、ドイツと後に緊張を生み出す有名な予防線よって、ロシアを孤立させることに執心するようになる。我々はそれに、ベルサイユ条約による諸条件、経済危機、インフレーションを付け加えよう。それ以来、ドイツナショナリズムは、「集団的強迫観念(complexe obsidionnal)」を発達させ、地政学は分析と地図を多用してこうした観念を涵養することになる。

応用科学—我々はこの問題に後で触れる—である地政学は、ドイツとイタリアのみではないがとりわけこ

の二国の一連の政治的な神話に形式を与える道具である。事実、ファシスト運動やナチ運動と地政学、より一般的には独裁と地政学の間に密接な相関があることには、こうした相関が議会制民主主義においてははるかに目立たないので、驚かされる。

自然主義の神話、始源的な力の崇拝、運動中の運動に対する信頼、もし可能ならば地球規模の空間を管理することへのあこがれが、第一次大戦後にファシズムとナチズムを方向付けることになる新たな諸要素となる。それらは、反人間主義、反自由主義、反個人主義、「文化」に対する一般的な敵対を通して、戦争の最前線で生まれた世界を理解するための様式である。我々がのちに見るように、地政学はこの同一の基盤上に、それ固有の仕方で、現実と虚構に満ちた世界の新たなヴィジョンを勝手に思い描くことに貢献するのである。

第一次世界大戦直後にマルクス主義が、別の地理学の構想を対置させることが可能であったとしても、それがどのようなものになったかを知ることは不可能である。カール・ウィットフォーゲルは 1929 年にこの政治的空虚を埋めようとして、別の地理学の構想を実行しようとした。しかしながら地政学は勝手に独立した場を持っていた。ウィットフォーゲルの諸論文は、世界を「複数の生産単位の膨大な複合体」[70] として見ていたマルクスに対して、世界を巨大な闘争の場と考えるこれらの「地政学的修正主義者たち(geo-politischen Revisionisten)」と対峙して、均衡を回復させることはできなかった。地政学が最終審級においてその主張とは裏腹に、生よりも死、構築よりも破壊へと向かっていることは明らかであり、以下の頁ではその点をはっきりと強調することになるだろう。

テュルゴー以来、地理に関する古典的唯物論者の命題はいずれにせよ、自然に対する、自然の中での、自然を通した人々の労働であったのに対して、地政学者たちにとってこの命題は、徐々に失われてついには消滅してしまう。地政学者たちは、唯物論者の命題を、その古典的形態のみならずマルクス主義的形態においても、完全に隠蔽してしまった。彼らは唯物論的命題を、切り詰められた命題、つまり労働過程とはほとんど無関係な土地、民族、生活空間('Lebensraum')という命題に置き換える。まさにそれが、権力(pouvoir)関係に中心を置く分析と力(force)の関係に中心を置く分析の間にある差異なのである。

【注】

1) Paul Valéry, *Variété*, Gallimard, Paris, 1924, p.11.
2) René Girard, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Grasset, Paris, 1961, p.17.ルネ・ジラール,古田幸男訳(1971)『欲望の現象学』法政大学出版局.
3) Strabon, *Géographie*, Hachette, Paris, 1873, Amédée Tardieu によるギリシャ語からの翻訳、p.1.
4) *Idem*,p.2.
5) *Idem*,p.14.
6) Turgot,*Sur la Géographie politique in Gustave Schelle, Œuvre de Turgot et documents le concernant*, Librairie Félix Alcan, Paris, 1913,1re édition, environ 1751.
7)Gérard Mairet, *Les grandes ouvres politiques*, Librairie Générale Francaise, Paris,1993,p.147.
8) Adam Smith, *Recherches sur la nature et les causes de la richesse des Nations*, Gallimard, Paris ,1976,1re édtion, 1776.アダム・スミス,大河内一男監訳(1988)『国富論』,中央公論社
9) Turgot,*Sur la géographie politique in Gustave Schelle, op.cit.*, vol.1,p.439.
10) *Ibidem.*
11) *Idem*,vol.1,p.257.
12) *Idem*,vol,1,p.258.
13) *Ibidem.*
14) *Ibidem.*
15) *Idem*,vol.1,p.328.
16) *Ibidem.*
17) Emile Levasseur, Gustave Schelle による引用 *op.cit.*, vol.1, p.59.
18) Léo Strauss, *Droit naturel et Histoire*, Flammarion, Paris, 1986, p.165. レオ・シュトラウス,塚崎智・石崎嘉彦訳(1988)『自然権と歴史』昭和堂.
19) Idem,pp 165-166.
20) Carl Scmitt, *Der Nomos der Erde*, Duncker&Humblot, Berlin, 1988,ドイツ語初版, 1950, p.13. カール・シュミット, 新田邦夫訳(1976)『大地のノモス』上・下,福村書店.
21) Guillaume de Humboldt,*Essai sur les limites de l'action de l'Etat*, G.Baaillére, Paris, 1867, Henry Chrétien, 2e éditions allemande 1836.
22) *Idem.*
23) ジャン・イポリットによるヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル *Principes de la philosophie du droit* への序論 Union Générale d'Edition, Paris,1963(上妻精・今野雅方訳(1987)『ヘーゲル読解入門』国文社)。ドイツ語初版(1821)のアンドレ・カーンによる翻訳 pp.14-15.
24) *Idem*,p.15.

25) *Ibidem.*

26) G.W.F.Hegel, *La Rasion dans l'Histoire*, Union Générale d'Editions, Paris,1965. コスタ・パペアノ訳。1822年から1830年にかけてのヘーゲルの手稿と学部講義ノートの集成というタイトルでまとめられている。ヘーゲル,長谷川宏訳(1994)『歴史哲学講義』上・下, 岩波文庫.

27) Egon Friedell, Kulturegeschichte der Neuzeit, C.H.Beck, Munich, 1987, Vol.1,p.747.

28) Carl Scmitt-Dorotic,(我々が既に引用したカール・シュミット) *Poitische Romantik*, Duncker und Humbolt, Munich et Berlin,1919,p.53.カール・シュミット,大久保和郎訳(1970)『政治的ロマン主義』みすず書房.

29) *Idem*,p.56.

30) E.Friedell によって引用された Adam Müller, *op. cit.*, pp. 977-978.

31)「völkish」という言葉の翻訳には問題がある。我々は「ポピュリズム的と国家ー民衆的」という二重の意味で、この言葉を理解することを提案する。「国家的」という側面に多少ともナショナリスト的な意味(コノテーション)が暗示され、「民衆的」という側面に多少とも人種的な意味が暗示される。このナショナリスト的かつ人種主義的内容がナチズムとともに次第にその優位を高めることになる。

32) E.Kapp, *Philosophische oder vergleichende allgemeine Erdkunde als wissenschaftlische Darstellung der Erdverhältnisse und des Menschenlebens*の第二部, *Die politische Geographie.* Verlag von G.Westermann, Braunschweig, 1845.

33) C.Scmitt, *Terre et Mer. Un point de vue sur l'histoire mondiale*, Labyrinthe, Paris,1985, Jean-Louis Pesteil 訳, ドイツ語初版,1950. カール・シュミット,生松敬三・前野光弘訳(1971)『陸と海と』福村書店.

34)「Erdkunde」は、単純に翻訳すると問題となるもうひとつのドイツ語の単語である。我々は図式的には、「Erdkunde」が「大地の認識」であり、「大地の記述」としての地理学となる「Geographie」とは異なると言うことができる。

35) E.Kapp,*op.cit.*,préface,p.V.

36) *Idem*,p.VII.

37) *Idem*,p.89

38) *Idem*,p.88.

39) E.Kapp によって引用された Ritter,*idem*,p.29,note.

40) C.Scmitt,*Terre et Mer,op.cit.*,p.22.

41) C.Scmitt,*Der Nomos der Erde,op.cit.*,p.13.

42) E.Kapp,*op.cit.*,p.96.

43) *Idem*,p.163.

44) *Idem*,p.249.

45) *Idem*,p.250.

46) *Idem*,p.251.

47) ダーウィニズムと「社会ダーウィニズム」の問題には、第二部で戻ることになろう。

48) E.Friedell,*op.cit.*,vol.2,p.1162.

49) Arthur de Gobineau, *Essai sur l'inégalité des races humaines*, Librairie Firmin Didot Frères et Rumpler Libraire, Paris et Hanovre,1853-1855,4 vol.

50) Jeanine Buenzod,*La fromation de la pensée de Gobineau et l'《Essai sur l'inégalité des races humaines》*, Droz, Genève, 1976,p.453.

51) Houston Stewart Chamberlain,*La genèse du XXe siècle*, Payot, Paris, 1913,2 vol., Robert Godet 訳,ドイツ語初版, 1898.

52) Alfred Rosenberg, *Le Myhte du XXe siècle*, Avalon, Paris, 1986, Alder von Scolle 訳,ドイツ語初版,1935.

53) Friedrich Ratzel, *Anthropogeographie oder Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte*, J.Engelhorn, Stuttgart, 第1巻.1882, 第2巻1891.

54) F.Ratzel,*Das Meer als Quelle der Völkergrösse. Eine politisch-geographische Studie*, Oldenbourg, Munich, 1900.

55) Linin, *L'impérialisme, stade suprême du capitalisme.* édtions en langues étrangère, Pékin, 1969,ロシア語初版, 1916, 編集者訳, レーニン,宇高基輔訳(1956)『帝国主義論』岩波文庫.

56) Max Weber, Pier Paolo Portinaro による引用,*Nel tramonte dell' Occidente:la geopolitica in Comunitú*, octobre 1982, pp.16-17.

57) Alfred Tayer Mahan, *The influence of Sea Power upon History.1600-1783*, Boston, Little Brown,1895,初版, 1890 マハン, 北村謙一訳(1982)『海上権力史論』原書房(抄訳).

58) Halford L.Mackinder,*The Geographical Pivot of History*, Ed. The Royal Geographical Society, Londres, 1969, 初版 1904.

59) Jean-Louis Dumas,*Histoire de la pensée.Philosophie et Philosophes*, Tallandier, Paris, 1990, vol.3: *Temps modernes*, p.156.

60) Angelo D'Orsi,*L'ideologia politica del futurismo*, Il Segnalibro, Turin,1992, p.11.

61) Max Stirner,*L'Unique et sa Propriété et autres écrits*, L'Age d'Homme, Lausanne, 1972, P.Gallissaire et A.Sauge 訳, ドイツ語初版,1845,p.85.シュティルナー,草間平作訳(1929)『唯一者とその所有』上・下,岩波文庫.

62) José Ortega y Gasset,*La révolte des masses*, Gallimard, Paris, 1961, Louis Parrot 訳,スペイン語初版, 1930, p.488. オルテガ,桑名一博訳(1991)『大衆の反逆』白水社.

63) *Idem*,p.48

64) Friedrich Nietzsche, *Par-delà bien et mal*, Gallimard, Paris, 1971 Cornélius Heim 訳,ドイツ語初版, 1885, p.186. ニーチェ,信太正三訳(1993)『善悪の彼岸　道徳の系譜』ちくま学芸文庫.

65) J.Ortega y Gassete,*op.cit.*,p.60

66) *Idem*,p.118

67) Rudolf Kjellen, *Die Grossmächte der Gegenwart*, Teubner, Leipzig et berlin, 1916,C.Koch 訳, スウェーデン語初版, 1914.

68) R.Kjellen,*Der Staat als Lebensform*, Vowinkel, Berlin, 1924,J.Sandmeier 訳,スウェーデン語初版,1916.

69) Andrè Lalande の『哲学事典』(*Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, PUF, Paris, 1976)によれば、相観学とは外部に現れた身体的な記号の研究の一部として特徴づけられる。ロベール辞典は相観学を科学を超えた学問として定義しており、個人の心理的かつ道徳的な諸特徴をその身体的な側面、とりわけその顔の輪郭や表情に還元することを目標としている。

70) K.A.Wittfogel,*Geopolitik,geographischer Materialismus und Marxismus in Unter dem Banner des Marxismus*, Berlin, 第三部,1929,p.716.

【訳者付記】

・注において、本文のなかでフランス語訳されたドイツ語原文が記載されている箇所があるが、ここではドイツ語原文は全て省略した。

・原文では各頁ごとに注番号が振られているが、ここでは通し番号とした。

・邦語訳のあるものはできるだけ参照したが、ドイツ語文献のフランス語訳などの場合、日本語訳とフランス語訳が合わない部分があり、ここでは本文の方を尊重した。

この論文は、クロード・ラフェスタン、ダリオ・ロプレノ、イヴァン・パステール『地政学と歴史』の第一部「地政学の起源」の第一章「地理学と社会」の翻訳である。

この著作の章立ては、第一部第二章「ラッツェル地理学：地政学への移行？」、第三章「地政学の系譜学」、第二部「地政学とファシズム」第一章「ドイツ地政学：ヴェルサイユへの応答？」、第二章「イタリアとスペイン、帝国の二つのノスタルジー」、第三章「テクストからイメージへ」、第三部「地政学への回帰」、結論、となっている。ラフェスタンたちはラッツェルを地政学から救い出すと同時に、近年の地政学の「復活」に対して厳しい批判の目を向けている。ここに訳出した第一章は概観的ではあるが、19 世紀以降のヨーロッパ思想の核に「大地」をめぐる地政学的問題が常にまとわりついていることを論じている点で興味深いと思われる。